

## 紹介

Hok-lam Chan(陳學霖)著

### *Legend of the Building of Old Peking*——北京の築城傳説

二階堂 善弘

本書は陳學霖氏による、有名な北京築城の傳説を扱ったものである。本書の記載によれば、陳氏は香港中文大學の教授で、またワシントン大學の併任教授であられ、宋から清にかけての中國の歴史・文化についての多數の著作を持つておられるとのことである。

ただこの書は、同様の内容を扱った同氏の『劉伯溫與哪吒城——北京建城的傳説』（東大圖書公司・一九九六年）の記載を英譯した部分が多く、内容が重複する。さらに同書については本誌の第五八卷一號において、金文京氏による詳細な書評が存在する。そのため、自分としては新たに付け加える部分はほとんど無きに等しいのであるが、非力を顧みず、ここでは取えて幾つか

の新しい論點に注意して紹介してみたい。まず本書の構成は次のようになってい

導言

第一章 劉秉忠・哪吒太子と元の大都の

築城

第二章 劉伯溫・哪吒太子と明の北京の

築城

第三章 モンゴルの傳説における永樂帝

の北京築城

第四章 劉伯溫・姚廣孝・沈萬三と北京

の築城

附録

このうち、全體としては第一章と第二章とを合わせて第一部「哪吒城としての古北京——その原形と變容」とし、第三章と第四章を第二部「矢の届いた範圍を都とする——明代の北京城地の選定」とする。そして附録の部分を第三部に當てている。これは『劉伯溫與哪吒城——北京建城的傳説』とはやや構成を異にするものである。

第一部で主として扱う「哪吒城」の傳説は、よく知られたものであり、現在でも北京首都空港には哪吒の姿を飾った繪がある

ほどである。すなわち、明代に北京を建都するに當たつて、風水の大家である劉伯溫（劉基）が姚廣孝と協力して、三面六臂、或いは八臂兩足の哪吒太子の姿に象つて設計したというものである。

この傳説については、E.T.C. Werner, *Myth and Legend of China* (1924) & L.C. Arlington v William Lewisohn *In Search of Old Peking* (1935) など詳しく紹介されているが、哪吒太子のどの部分が北京のどの部分に當たるかは、各傳承によつて若干異なっている。本書二二八―二三〇頁においては、主に哪吒の頭が正陽門、鼻が棋盤街、口は中華門、右肩は哈達門（崇文門）、左肩は順治門（宣武門）、右手は朝陽門、左手は平則門（阜成門）、膝が東直門と西直門、足は安定門と德勝門に當たるといった説が紹介されている。この説によれば、別に三面六臂でなくても構わないと思われるが、あまりその點については注意されていない。一三四頁には、別の傳承による圖が紹介されているが、こちらの場合は三面六臂のそれぞれに對應する。ただむしろ足の部分が宣武門・崇文門に當たり、兩手が安定門と德勝門に當てられてい

る。

ある意味では、三面六臂の形象或いは類似的の形象を持つ神であれば、何も哪吒太子でなくてもよさそうなのである。しかし、元以降、特に明清から現代にかけては、「三面六臂の神」といえば「哪吒太子」と言えるほど、哪吒は著名な存在になっており、そのためにこの傳承に附會されたものと考えられる。

さてこの傳説が全くの虚構であることは、すでに本書において詳しい記述があり、また金文京氏の評においても指摘されている。すなわち劉伯溫は洪武八年（一三七五）に没しており、永樂時代の北京城建設には、何ら關わることはなかった。またこの傳説に登場するもう一方の重要人物である姚廣孝も、北京築城についてはさほど大きな役割を果たしたとは考えにくく、恐らくは徹頭徹尾、史實とはかけ離れた傳承なのであると推察される。

陳氏はこの話の來源が元の時代に大都の建設に力のあつた劉秉忠の話を下敷きにしてゐることを指摘する。もともと遼代に南京が置かれ、金代に中都が置かれたこの地において、新たにその東北の位置に大都の

都城を建設した時、その計劃に深く關わつたのは劉秉忠であつた。またその水利事業については、郭守敬が多大な貢獻を行っている。この「劉」秉忠が後に「劉」伯溫へとその主體を變じてしまつたのは、恐らく間違いないであらう。

もつとも、劉伯溫自身は明の南京城の建設には深く關わつており、南京の皇城の地を卜して選定したのは劉伯溫である。後に靖難の役が起り、燕王、すなわち永樂帝による北京への遷都が行われた。むろん現在の北京の基本的な構造は、この明代の北京を引き繼ぐものとされる。

何故、傳承の主體が後に劉伯溫になつてしまつたのか。そして哪吒太子になつたのか。一言で言えば、それは民間における知名度によるものであらう。

漢民族の民間傳承においては、劉伯溫の人氣は絶大である。明初の人物を擧げる場合、功臣第一とされる李善長を差し置いて、まず最初に必ず言及されるのは劉伯溫こと劉基である。その知名度は日本に喩えるなら、ほとんど現在の水戸黃門に匹敵する。通俗文學での重視や、その風水大家として人氣が相俟つて、今では劉伯溫の名は諸

葛孔明に近いほどのものとなっている。このあたりは、日本の研究者にとつては些か理解しにくいかもしれない。

史實と民間傳承とのズレは、日本においてもしばしば見られることであるが、特に通俗文學の影響に起因する場合が多い。民間においては、史實を元にした講談や芝居によつて特定の歴史人物が有名になることがあり、それは歴史的な評價とはしばしば異なっている。そのために、北宋代では包公こと包拯が絶大な知名度を誇り、同時期の歐陽修ですらその存在がさすむ、ということが起りうる。民間傳承においては、何よりもこの知名度がすべての物差しに優先される。

そのため、明初の傳承も、何かにつけ劉伯溫にこじつけられるのも、ある意味では常態となつていたのである。

哪吒太子についても同様で、この神の人氣は、明以降の民間では絶大である。特に『西遊記』や『封神演義』において活躍するために、その蓮華を象つた姿、槍や輪を持つた姿は非常によく知られている。現在においても、京劇において神話を題材にした場合は、必ずといってよいほどよく登場

する少年神である。要するに、哪吒太子と劉伯温という組み合わせは、民間傳承においては、最もよく知られたものを選んだというだけに過ぎないのである。

もつとも、哪吒太子については、もつとも早い時期から大都の築城に關係するものとして扱われていたようである。これはやはり、哪吒太子が三面六臂という姿で知られていることが影響しているであろう。

また『劉伯温與哪吒城』より大幅に變わった點としては、この哪吒太子の由來について、最新の研究成果を大きく取り入れていることが挙げられよう。『劉伯温與哪吒城』においては、陳氏が題材とした論文は柳存仁氏の *Buddhist and Taoist Influences on Chinese Novels, Vol. I: The Authorship of the Feng Shen Yen* (1962) なり、やや古い研究が多かった。しかし哪吒太子については近年になって多くの研究成果が出されている。陳氏は本書において、主に拙論「哪吒太子考」(『道教の歴史と文化』雄山閣、一九九八)や、國立中山大學清代學術研究中心他主編『第一屆哪吒學術研討會論文集』(新文豐出版、二〇〇三)に所收の諸論文、中でも蕭登福氏の「哪吒溯源」に據

って、哪吒太子の變遷を詳細に分析している。

哪吒太子は、インドにおいては毘沙門天の子として知られるナラクーパーラという神であった。この音寫は那羅鳩婆・那吒俱伐羅など幾つかの種類があったが、後に那吒(哪吒)という表記に落ち着いた。毘沙門天には善貳・獨健・那吒・常見・最勝といった五太子があったが、那吒はその中の三太子として、單に護法の神としての姿が傳えられている。唐代においては、道宣に佛牙を献上したという話が有名であり、圓仁の『入唐求法巡禮行記』には、この佛牙が實際に祀られているのを見聞したという記録が残っている。また禪の公案においては、「那吒折骨還父」という話が知られていた。しかし、その後佛教においてはこれをそれほど重視せず、かえって民間信仰や道教にその信仰は吸収されていった。明代の道教經典『道法會元』などには、道教の神將と化した哪吒太子の名が見えている。この神が有名になるのは、元から明にかけてのことであるが、その間にいろいろな傳承が附會されていく。

特によく知られているのは、その父子相

克の話で、哪吒は父である李天王(毘沙門天王)と争い、後に釋迦如來が兩者を仲裁したというものである。李天王的塔は、この時に哪吒太子を伏すために與えられたとする。またかつてこの神話について、O'Jee氏による、ペルシアの『王書』に記される英雄ロスタムとソホラーブの父子相克説話の影響を主張する向きもあったが、あまりにも突飛であるためか、現在ではこの説はあまり顧みられていない。

なおこの時に、哪吒太子の身體は蓮華によつて作られているという傳承が派生した。またこれに附隨して、四海龍王と争い、龍王の太子を退治したという話も作られている。『西遊記』において、孫悟空が天界に叛亂を企てた時に眞つ先に派遣されたのが、李天王と哪吒太子の親子である。この兩者は、明代の道教や民間信仰においては、天界の代表的な武神と見なされるに至っている。

しかし最も哪吒の名を知らしめているのは、『封神演義』での活躍であろう。『封神演義』は昨今ようやく日本でも知られるようになってきたが、漢民族においては、ほとんどインドにおける「ラーマーヤナ」

『マハーバーラタ』と同じような神話傳説の一つとして扱われており、また中華圏においてはよく知られた作品である。この物語の中で哪吒は、殷と周の争いの中、終始周側の代表的な武將として活躍する。現在の哪吒太子の形象として知られているのは、すなわちこの『封神演義』での姿である。

蓮華の化身であり、手に乾坤圈という輪、混天綾という布を持ち、足元の風と火の二輪に乗って動く。さらに火尖槍という武器を持つ。

「哪吒城」としての北京は、この姿の哪吒太子を象ったとされるものである。例えば、風火二輪は、崇文門と宣武門に当たり、乾坤圈は東直門に当たっている。とはいえ、このような形は『封神演義』以降のことなので、恐らくそれ以前の傳承では異なっていたものと考えられる。

また陳氏は、哪吒が龍王を退治したという傳承と、北京における水利の克服とを關連づけて論ずるが、これはやや附會の感をぬぐえない。

陳氏の指摘で重要なのは、むしろ明代北京の築城において、眞武大帝との關連を示唆した部分ではないだろうか（九六～九七

頁、及び一八七～一八九頁）。

明初の時點において哪吒太子は、民間はともかく國家的な祭祀で扱われるような神ではない。この當時重視されたのは、壓倒的に眞武大帝（玄天上帝）の信仰である。

明朝、特に永樂期における眞武信仰への肩入れの仕方は、やや異様に思えるほどである。このためか、後世になると永樂帝は眞武大帝の下凡であるという説が起こった。

現在の紫禁城でも、欽安殿に眞武大帝をそのまま引き繼いで祀っている。

眞武大帝の重要な役割は、北方守護である。眞武自體、四神の一つ北方の玄武が發展したものである。もともとその本體である龜と蛇は、後に眞武大帝配下の二將軍と見なされるに至った。元來は北方守護の神としては、哪吒の父の李天王つまり毘沙門天があるが、この神が李天王に變じて後は、ややその信仰は衰えていき、眞武大帝の北方守護の役割が強まった。宋代には道教において北極を守る神將として、北極紫微大帝配下とされる天蓬・天猷・眞武・黑煞の四將があつたが、その後眞武だけが特に重視され、元においては紫微大帝に代わり、玄天上帝として祭祀されるようになった。

明代にはこの眞武を國家鎮護の神とするようになる。それはもちろん、漢民族にとつて北方は、匈奴の昔から契丹の遼や女眞の金に至るまで、異民族が攻めてくる場所であり、鬼門とも言える方角であつたからであらう。

眞武大帝の姿は、他の道教の一般の神々とは異なり、やや異様な感がある。冠を着けず、ざんばら髪のままである。また靴は履かず、裸足である。手に七星劍を執り、黒い服を身に付け、黒い旗をおしたてている。時に武裝する場合は黄金の甲冑をまとう。足の下には龜と蛇を踏んでいることが多い。これは玄武の本體であつたものであるが、現在は配下の二將軍として扱われる。先にもふれた通り、明代には眞武大帝信仰が異様とも思われるほどに發展していく。永樂帝がその聖地である湖北省の武當山にある宮觀を大々的に整備したことはよく知られているが、現在ではこの武當山の諸宮觀は世界遺産に指定されているほどのものとなつている。特に山頂にある金殿は、建物の屋根・壁などがすべて銅で作られており、非常に有名である。なお眞武の聖地が武當山にあることは意外に思われがちであ

るが、實はこの地は、中國が南北に分裂した時に係争の地となりやすかった襄陽の近くである。特に南宋の時期には、この地における北方守護の意味合いは、特別なものがあつたであらう。

そして五行説によつて北方は「水」に、色は「黒」に配當される。そのために眞武大帝の裝束は黒であることが多い。また眞武は水神としての役割も併せて持つている。もし北京城に對して、明の王室が特別な配慮を行つてその信仰を反映したとするならば、本來は眞武大帝の方がその任にふさわしいはずなのである。つまり、明初の北京築城においては、哪吒太子の出番は無い、と考へるのがむしろ自然である。

或いは、哪吒太子と眞武大帝の間に何かしらの關連を想定してもよい。しかし、この兩者は道教においても民間信仰においても、意外に接點が少ない神である。

哪吒太子が大活躍する『封神演義』には、眞武大帝が登場せず、また『西遊記』においても、眞武大帝はあまり目立たない存在である。逆に眞武大帝を中心とする『北遊記』という小説においては、哪吒の出番はほとんど無い。

『二郎鎖齊天大聖』や『二郎神醉射鎖魔鏡』などの雜劇では、北極驅邪院主として眞武大帝が登場し、天界の將として二郎神や哪吒太子などの神が現れるが、兩者は上司と部下といった形で扱われており、擔う役割は異なっている。

形象面からも眞武大帝と哪吒太子との混同は考えにくい。従つて、眞武大帝に關わる説話が哪吒太子に移されたという見方はやや成立しにくい。この北京築城の傳説においても、哪吒太子の傳承はあくまでその三面六臂や八臂の形象に觸發されて附會されたものであらう。

本書の第二部「矢の届いた範圍を都とする」において陳氏は、劉伯溫と北京城に關する別の傳承について検討されている。それは「劉伯溫が新たに北京城を建設するに當たつて、大將軍徐達に命じて矢を射させ、その矢の落ちたところまでを都とする」という傳承である。

この話には有名な沈萬三も登場する。それによれば、もともといまの北京の什刹海・北海・中南海に水は無く、單なる平地であつた。北京築城の費用を捻出するため、劉伯溫は部下の者たちに、沈萬三なる

人物を探せと命ずる。捕らえられてきた沈萬三に、劉伯溫は資金を出すように命ずるが、萬三は乞食同然の姿であり、とても金など出せないと告げる。伯溫が怒つて萬三を打ち据えようと、たまりかねた萬三は「あそこを掘れば金がある」と白狀する。人を派遣して掘らせてみると、多くの銀子が見つかった。これを數回繰り返して、おかげで什刹海・北海・中南海は穴だらけになり、そこに水が入り込んできたので、いまのような姿になつてしまつた。こうして北京築城の費用はまかなわれた。

この話には別のバリエーションもあつて、そこでは燕王であつた永樂帝が、やはり沈萬三を拷問のうえ、大量の金銀を掘り出したというものもある。

いずれにせよ、これらの話が根も葉も無い虚構であることは、すぐに判明するであらう。そもそも、沈萬三は江南隨一の資産家として廣くその名が知られているが、その築城に協力したのは南京であり、またあまりに莫大であつた資産が朱元璋に忌避されて、その家産の多くを沒收された。むしろ北京において金を隠して乞食をしていたなどと言うのはあり得ない話である。

結局は、これも當時の資産家の代名詞であった沈萬三を、むりやり北京の築城説話に關連させようとしたから無理な話になっているのだと思われる。

ところで民間説話における沈萬三は、その「聚寶盆」の傳説が知られている。聚寶盆とは、銅錢や金銀を載せると、その量が數倍になるという不思議な道具である。沈萬三を主役としたドラマのタイトルにもなっているほど、萬三との結びつきは深い。

北京築城に絡んでは、哪吒城を造った劉伯溫が、後に北京の水を支配する龍王と對立し、その井戸や川がすべて涸れるという事態に陥った時、高亮という武將が伯溫の命を受けて龍王と戦ったという説話もある。高亮が戦って死んだ西直門の外の橋を、「高亮橋」と呼んだと言う。

また一方でこの話に沈萬三が絡む場合もある。この時に萬三は不思議な盆を使って、龍王と對峙する。しかしこの場合、その盆が聚寶盆であるとは明言されていない。その效用も異なっているようである。別の傳承によれば、劉伯溫自身が李天王の寶物である寶塔を借りて、龍王を退治したとの説話もある。

これらの龍王と對決するという説話は、実際には『封神演義』における哪吒太子の説話に據っているのではないかと思われる。

哪吒は李靖（李天王）の三男として生まれ、七歳の時に水浴びをしていて、龍王の太子と諍いを起こし、これを殺してしまふ。哪吒はその力で、東海にて大暴れする。これが「哪吒鬧海」として知られる故事である。その後、怒った東海龍王は、他の四海龍王を呼び集めて李靖を脅し、そのために哪吒は自分の命を絶つて魂だけの存在となつた。師匠にあたる太乙真人が蓮華をもつて哪吒の身體を作り復活し、やがて父李靖と争うこととなる。

もつとも、龍退治の話自体は、二郎神や許眞君の話なども廣く知られており、或いは眞武帝の龜蛇討伐の話のアレンジしたものであるかもしれない。哪吒の話が轉用されたとも言切れない面がある。

陳氏は「八臂哪吒城」の傳承が後にどんなと發展していき、やがて「高亮橋」や「沈萬三の盆」などの別の要素を重視したものにシフトしていくことを興味深いことと分析しているようである（二五七―二五九頁）。それにしても、民間傳承はあまり

にも容易に分化、變容していくために、その過程を把握するのは難しい。このような困難なテーマをよくも選んだものである。

むしろ、陳氏はそもそも劉伯溫を學位論文の主對象に選び、なおかつその歴史的な姿と、傳承における姿との二面性を扱つておられるほどであり、この北京築城の傳承についても、その豊富な知識を元に分析を行っている。その意味では適任者と言えるであろう。

なお民間における傳説は、時に荒唐無稽な様相を示すことがある。特に劉伯溫が絡む説話の數多くが、その實際の像とはかけ離れたものであることが多い。もつとも、だからこそ劉伯溫は現在でもマジシャンとして絶大な人氣を誇っているわけである。そもそも民間傳承における劉伯溫は道士として登場し、儒者であることを感じさせるものはほとんどない。しかし、これがいまの中國の人々にとって「常識」となっているなら、やはりそのありのままの姿を理解する必要があらむと思われる。一方で、歴史文獻の記載だけからは、このような状況を把握することは難しい。

自分は昨年来、何度か臺灣において調査

を行っていたが、毎回テレビドラマ『神機妙算・劉伯溫』が放映され、高視聴率を稼いでいるのを見た。このドラマもかなり荒

唐無稽な内容であったが、これにより劉伯溫には、またしても新たな傳承が付け加えられているわけである。このような現代に

も生き続けている像を理解することで、研究はより深みを増すのではないだろうか。

二〇〇八年二月 香港 中文大學出版社

四五〇頁 一〇〇〇〇圓